〔神と仏の美術展によせて〕

〔新収館蔵品紹介〕木造地蔵菩薩立像

地蔵菩薩は路傍の石地蔵に代表されるように、赤い頭巾や腹掛けをかける仏教習俗を通じて一般大衆に広く信仰されてきました。これを信じれば、さまざまな利益が得られ、病苦からも免れ、地獄に落ちても必ず救われるとされ、延命・安産・子育て・雨降り・悪病除けのために祈願されています。旧暦夏七月の地蔵盆ではいまも全国各地で盛んです。

わが国最初の地蔵菩薩は記録によると、奈良時代、光明皇后が発願した東大寺講堂像で、中尊が千手観音、左右に虚空蔵菩薩とペアとなって併置されています。虚空蔵菩薩とのこの組み合わせは初期地蔵信仰の一形態を示すものであり、今日、京都広隆寺講堂に遺品が知られます。他に観音菩薩とペアの信仰もあり、中国敦煌壁画、わが国平安初期の室生寺金堂（及び三本松）、平安後期の栃木大谷磨崖仏、鎌倉初期の神奈川満願寺の諸像が著名です。

独尊の地蔵信仰は興福寺内にあった地蔵堂のものが最も古く、宝亀二年（七七一）に亡くなった藤原永手の追善供養のためといわれています。立像形式の現存最古は法隆寺金堂像（旧大御輪寺像）です。

地獄の救済者としての地蔵信仰は平安中期の浄土信仰の隆盛からで、六道（地獄・餓鬼・畜生・阿修羅・人・天）に各一体の地蔵菩薩を配した六地蔵信仰に代表されます。平安後期には半跏形式の地蔵菩薩も造られました。平安末・鎌倉時代になると、実際の着衣を着せる裸形像（奈良伝香寺）や、雲に乗る地蔵菩薩の来迎像（春日社第三殿の本地仏をあらわすものなど）も造られます。

さて地蔵菩薩を美術作品として見る場合、手の動き（印相）にまず眼がとまります。これを整理すると、平安時代では（A）左手をまげ、宝球を捧げ、右手は伸ばして五指を伸ばし（与願印風）、錫杖をもたないものが一般的です。しかし（B）左手に宝珠を持たぬもの、（C）五指を伸ばした右手が触地印風に掌を伏せるもの、あるいは（D）内側に向けるもの、（E）左手を胸前に置き、両手ともに第一、二指を捻じるもの（矢田寺式）などがあり、初期地蔵菩薩の印相は多彩です。後に定型化された（F）錫杖を執る地蔵菩薩はわが国ではいつから始まるか、改めて問い直すと、彫刻では別材製の両手首が後世欠けてしまい、補修されているのが一般的なので、実は明確なことがいえないのが現状です。

地蔵菩薩がまとう着衣形式についても、ここで整理してみると、平安初期では①左肩に袈裟を懸け、右肩に祇支を表すのが一般的なのですが、②右肩を露にした偏袒右肩、③祇支の上に袈裟の先を懸ける変則的な偏袒右肩式のタイプなどがあります。平安後期ではさらに④腹部に裙や裙の結び紐を表す式が加わり、⑤胸に内衣を表す着衣形式は鎌倉時代の流行と見た方がよいようです。

さて、新たに大和文華館のコレクションに加わった地蔵菩薩立像（像高51.5cm）は愛すべき小品であり、ここで紹介することにします。形状については通形の形式を踏んでおり、新補の両手は（A）、着衣は①と④のタイプで、左肩に袈裟の吊り紐を表すのが本像の特徴のひとつです。これは平安後期に定型をみた着衣形式のひとつなのですが、注意すべきは右肩を覆う祇支を見ると、腕より垂れる袖が内側に長く、外側に短い点にあります。一般に平安後期の仏像では本像とは逆の垂下形式で表され、内側に短く、外側に長いのです。この違いは彩色文様を読み取る時に気づくのですが、要するに祇支の裏地が外からに見えるかどうかということでしょう。本像の場合、剝落・変色が甚大で、残念ながら裏地文様は読めませんが、袈裟（表）に切金線及び切金の四菱文、裙に八花文風の丸文、胸前の結び紐に緑青がわずかに認められ、平安後期以来の華やかな装飾意匠が想像できます。

ところで、本像のような袖の垂れ方は鎌倉初期頃から始まるようであり、大仏師快慶作の東大寺公慶堂の地蔵菩薩立像（一三世紀初期）がその最初期の位置にあるといえます。

最後に本像の様式について触れますと、伏した細い眼、頭部や肩の柔らかな丸み、肘を外にして袖が静かに垂れる横幅のある体型、腹部から足にかかる緩やかな曲面など、平安後期の伝統下にある表現と理解して差し支えありませんが、筆者にとっては一本調子の側面観が気にかかります。平安後期のいわゆる定朝仏は胸が薄く、背を丸めた猫背気味の姿勢が時代の典型であり、本像はその繊細さにおいて若干異なります。耳輪の太い、幅のある耳もまた平安後期の趣向からすれば無骨であるといわざるを得ません。衣文の彫り口がやや強い調子で、一木彫表現を思わせるようなところもあり、先に述べた着衣形式をも含んで考え合わせると、鎌倉時代に入る制作と見た方が穏当です。保守的傾向の強い仏師による造立と考えられましょう。

（鈴木喜博）

木造地蔵菩薩立像（正面）

同（側面）

同（背面）

季刊 美のたより No.123
平成10年 5 月21日
発行 大和文華館

Copyright ©2007 The Museum Yamatobunkakan. All Rights Reserved.